踏み絵
～上五島・長崎巡礼⑤～

遠藤周作は「沈黙」のあとがきに「長崎で見た摩滅した一つの踏絵が長い間心から離れず、それを踏んだ者の姿が私のなかで生きはじめていった」と書いている。

遠藤周作の代表作「沈黙」

踏み絵は江戸時代にキリスト教を禁止した際、キリストや聖母マリア像を踏ませて信者かどうかを見分けたもので、一六二八年、長崎奉行の水野守信が始めたものである。

踏むことを拒否すると厳しい拷問にかけられ、それでも棄教しない者は処刑された。キリスト教禁止令を出した豊臣秀吉の時代から徳川幕府の時代に殉教した者は五千人とも一万人とも言われる。

小説「沈黙」の中で役人が棄教させようとキリシタンを説得する際に「心から踏めとは言うとらぬ。こげんものはただの形だけのことゆえ、足かけ申したとてお前らの信心に傷はつくまい」という一節がある。

命あっての人生、私はこの役人の言葉に妙に共感する。もちろん、信ずる神のために殉教した人たちを軽んじる気持ちは毛頭ないが、自分は拷問されたならそれに堪えられず転ぶ（棄教）であろうと思うだけに、表面的に転んでも信仰生活を送れるのではないかと思うからである。

事実、踏み絵を踏んでも信仰を守った人たちが五島の隠れキリシタンである。彼らは一人の神父も存在しないのに明治に至るまで二百五十年余の間、信仰を守り続けた。

厳しい水責めの拷問（日本殉教者録から）

二百十五話で紹介した福江島出身のノンフィクション作家、今井美沙子が書いた「めだかの列島」の中にも、踏み絵を踏みながらも信仰を守った人たちのことが書かれている。

著者の先祖は大村藩の百姓で、キリシタン弾圧はひどく、毎年正月に踏み絵が実施されていた。

先祖のおじいちゃんは心の中で泣く泣く踏んで役人の目をごまかした。私を感動させたのはその踏み絵が行われる日の行為だ。

その日は朝から風呂に入って足をピカピカに洗い、編みたてのわら草履を履いて出かけたという。

そんなある日、大村藩の百姓の五島移住の話があり、先祖も志願した。許可が出され、約三千人が五島に移住したが、そのほとんどはキリシタンであった。

著者の先祖は五島灘を渡る際、心の中はうれしさでいっぱいで、思わず広い海に向かって「宗教は捨てんぞ!!」と叫んだという。踏み絵を踏んだとはいえ、彼らの厚い信仰心が血管を通して伝わって来る。

日本にキリスト教を伝えたフランシスコ・ザビエルとともにイエズス会を創立したイグナチオ・ロヨラの「霊操」の冒頭の「人は主なる神を賛美し、敬い、これに仕えて、それによって自分の救いをまっとうするために造られた」の言葉を思い出した。

なお「踏絵」は新聞用語辞典に従い「踏み絵」と表記した。

（元山口放送取締役ラジオ局長）

山口県で発見された踏み絵